

「無限磁場」の技術によるボイラーへの利用について、

「無限磁場」の燃料技術によってボイラーに使用される燃料油による大きな磁気による分子運動エネルギーがバーナーの噴出口から大気中に直接そして除々に開放されるので炎の噴出圧力は大きく増大することはない。

ボイラーでの従来の燃料消費量の減少率が各々燃料油と給水に大きな磁気による分子運動エネルギーを与えることにより特別な大きい燃料消費量の減少率になるという可能性がある

(1) バーナーから噴出される「無限磁場」の燃料技術による燃料油について、

(a) ところで、大きな磁気による分子運動エネルギーは「無限磁場」の燃料技術により燃料油の分子に発生する、その結果、燃料油の粘性は劇的に減少する。

(b) したがって、燃料油がバーナーから噴出される時、そして、燃料油は従来の微小粒子よりもより小さな微小粒子になって、従来の速度より速い速度で空中で広げられる、そして、燃料油と酸素ガス間の接触面積はより増加する。

(c) すなわち、燃料油が強い励起状態になっているので、燃料油の燃焼速度は燃料油の分子に発生する大きな磁気による分子運動エネルギーによって増加して、その結果より高い温度の炎になる。

(d) 炎の温度がより高温に達する、そして、カロリーが増加するので、燃料消費量の減少率はより高くなる。

(e) 従って通常の灯油の燃焼によれば、炎色は赤い。

しかし、「無限磁場」の燃料技術による燃料油によれば、炎の勢力は、増加して、赤色というよりはむしろ黄色に近い炎色になる。

(2) 「無限磁場」の燃料技術による燃焼ガスによるボイラ底面の熱伝導率の改善について、

(a) 通常、燃料油がバーナーから噴出される時、高温で燃焼ガスを構成する炎による非常に薄い膜の接着性流れがボイラの底面の上で発生して、それで覆い隠されると考えられる。

- (b) 私は、「薄膜の接着性流れ」を「熱伝達の妨害薄膜」と仮に呼ぶ。
- (c) つまり、すべての種類の燃焼ガスの熱伝導率が非常に低い、そして、むしろ、熱伝達の妨害材料としての能力が大きいと考えられる。
- (d) 燃焼ガスの熱伝導率は非常に低い、そして、燃焼ガスは混合ガス（例えば蒸気ガス (H₂O) と酸素ガス (O₂) と一酸化炭素ガス (CO) と炭酸ガス (CO₂) と窒素ガス (N₂) と水素ガス (H₂) とその他) として各々構成される。
- (e) 上記の炎を構成している燃焼ガスの熱伝導率 (Kcal/mh°C) を測る温度条件は、各々異なる。
- (f) 燃焼ガスは、以下の通り基準値として表される。
- 酸素ガス (O₂) = 0.026 : 100°Cの時
 - 一酸化炭素ガス (CO) = 0.026 : 100°Cの時
 - 二酸化炭素ガス (CO₂) = 0.034 : 300°Cの時
 - 窒素ガス (N₂) = 0.038 : 300°Cの時
 - 水蒸気ガス (H₂O) = 0.032 : 300°Cの時
 - 水素ガス (H₂) = 0.254 : 300°Cの時
- (g) 通常の燃料油がボイラのバーナーで燃やされるとき、少しの分子運動エネルギーもまったく燃焼ガスに発生しないので、ボイラの底面は燃焼ガスの粘性によって接着性流れから成る「熱伝達の妨害薄膜」で覆い隠される。
- (h) しかし、「無限磁場」の燃料技術によれば、すべての種類の燃焼ガスの粘性の劇的な減少によってボイラの底に付着している「熱伝達の妨害薄膜」が消えると考えられる。
- (i) したがって、「無限磁場」の燃料技術による燃料油によれば、燃料消費量の大きい減少率がボイラの底面で熱伝導率の大きな進歩によって達成されることができると考えざるを得ない。
- (3) 「無限磁場」の燃料技術によるボイラーの給水について。
- (a) 「無限磁場」の燃料技術によって、大きな磁気による分子運動エネルギーは、ボイラーの給水の分子に生み出される。

(b) ボイラへの給水が熱されるとき、燃料消費量は「無限磁場」の燃料技術によって大きな磁気による分子運動エネルギーの増加によって減少することができる。

(c) さらにまた、給水が加熱されて、蒸気になったあと、蒸気の大きな磁気による分子運動エネルギーはボイラで高温と高圧によって影響されなくて、まったく減少することはない。

(d) 従って、磁気による大きな分子運動エネルギーが「無限磁場」の技術によって高温と高圧で蒸気の分子に生み出されるので、蒸気によりタービンに与えられる運動エネルギーの量は増やされる、そして、その結果、発生する電力はまた増やされる。

(4) 「無限磁場」の技術による発電所の発電システムにおける効果について。

(a) 特に大規模なボイラーには大きな磁気による分子運動エネルギーが大量に重油「A」と給水に与える必要があるために、「トランス・マスター」装置が選ばれて、使われることは重要である。

(b) 「トランス・マスター」装置での大きな磁気による分子運動エネルギーが与えられたあと、それが30の時間から40時間までの間、弱くならないので、大きな磁気による分子運動エネルギーが給水を熱して発生する蒸気により蒸気タービンの原動力として使われるかもしれない。

(c) さて、「無限磁場」の燃料技術によって発電所の発電システムで(1)項、(2)項、(3)項で各々説明される燃料消費量の大きい減少効果を得ることができる可能性は、非常に大きい。

(d) したがって、(1)項と(2)項と(3)項に起因する燃料消費量の減少率が各々合計されるので、発電所の発電システムの燃料消費量の減少率が非常に大きくなると考えられる。

(e) つまり、燃料消費量の大きい減少率とCO₂の大きい減少による地球温暖化の防止効果による大きい経済的な影響が同時に一緒に現実化されるという可能性がある。

(f) 「無限磁場」の燃料技術による燃料消費量の減少効果に関しては、経済的な影響は特に大きく、同時に CO2 の大きい削減によって、地球温暖化の防止のためにきい役割を演ずるかもしれない。

(5) 使い古したボイラで振動と雑音を生み出すことについて、

(a) 「無限磁場」の燃料技術による燃料油がボイラの使い古したバーナーのために使われるとき、金属酸化物の薄膜が噴口の内面の上で発生する、そして、薄膜が積み重ねられる原因によってもたらされる雑音と振動はほとんど消される。

以上